

専門性の高い医療体制の中で、自分らしい毎日を。 PDレジデンス倉敷が示す新たな「選択肢」

パーキンソン病患者さまに特化した「PDレジデンス倉敷」の包括的な医療・診療体制は、地域の専門医療機関との連携によって実現します。リハビリをはじめ当施設の運営全般を監修いただく川崎医科大学 脳神経内科主任教授 三原雅史先生、新たに「倉敷脳神経内科クリニック」を開設される安田 雄院長、そして株式会社フィロソフィア代表取締役社長 堅田 陽介が「PDレジデンス倉敷」への期待、その社会的意義について意見を交わしました。

包括的な医療・看護体制を提供したい

——「PDレジデンス倉敷」設立の経緯についてお聞かせください。

堅田 私たちは20年以上にわたる訪問看護事業の中で、多くのパーキンソン病患者さまに接してきました。パーキンソン病患者さまをしっかりとケアするためには、訪問看護では質的・量的に限界があること、また脳神経内科医による継続的な訪問診療を含めた、これまでにない包括的なサポート体制が不可欠であることを実感していました。

三原 日本にはパーキンソン病患者さまを受け入れる脳神経内科医や医療機関の数が不足しています。また、パーキンソン病は活動性を高めるために運動を習慣づけることが大切な疾患ですが、週に1、2度の訪問・通所によるリハビ

リでは量が不足します。さらに症状が進行し続ける、悪化していくという前提をもつパーキンソン病のリハビリに対して、正しい知識をもった医療者の数も限られているのが現状です。

安田 服薬の数・頻度も非常に多い疾患ですから、規則的な生活を守る必要がありますが、在宅ではご本人の意思・ご家族によるサポートにも限界があります。症状が悪化するほど服薬の時間が守れなくなり、薬が効果を発揮しない時間が長くなるほど、転倒などのリスクも高まります。

——パーキンソン病を取り巻く環境にはまだまだ改善の余地があるということですね。

堅田 はい。残念ながら治療やケアにおいて選択肢が少ないのが現状であり、これを改善するためにも、私たちの考え

に賛同いただいた三原先生、安田先生のお力をお借りして、24時間・365日体制のケアが可能な「PDレジデンス倉敷」の設立に至りました。

施設型介入の強みを生かした専門性の高いケア

——リハビリや診療の特徴についてお聞かせください。

三原 「PDレジデンス倉敷」は、在宅環境の中にリハビリを介入させられる点が最大の強みであると思っていますので、その長所を最大限に生かすべく、私の監修のもと、川崎医療福祉大学の理学療法士とともにプログラムを構築しています。例えば進行期の方も含めて歩ける人には歩く機会を維持し、また座る時間が長くなる人には座位姿勢のケアを行いながら、少しでも運動量を確保することに主眼を置いています。また、言語聴覚士も常勤するため、嚥下についても日常的な指導が可能になります。

安田 同じ建物内の私たちのクリニックにおいては、訪問診療を頻回にわたって行う予定です。パーキンソン病はドーパミンが出にくくなる病気ですから、慌てることなく病気に向き合い、僅かな効果でも実感してもらうことで、前向きな気持ちを持ち続けていただくことも重視しています。また、新たな治療薬が続々と開発されていますから、それぞれの特性を加味した上で、先進的な投薬治療を取り入れられることも、「PDレジデンス倉敷」ならではの点だと思います。

——施設面ではいかがでしょうか？

堅田 安田先生のクリニックと同じく、調剤薬局も同じ建物に開設されますので、薬剤師も含めた手厚い服薬指導が



可能になります。さらに食事面では施設内で調理した温かくおいしい料理を食べていただき、嚥下に障害をおもちの方向けには調整食も提供します。入浴においても個浴（リフト付）、リクライニングチェア浴、シャワーベッド浴が可能な設備を導入し、各居室にトイレを備え付けるなど、ご自宅と変わらず過ごせる環境をご用意しました。

パーキンソン病治療・ケアのモデルケースとして

——「PDレジデンス倉敷」の今後にはどんなことを期待されますか？

三原 先ほど申し上げたように、パーキンソン病は特殊な疾患ですから、オープン後もスタッフにさまざまな経験や知識が蓄積され、さらに良いリハビリや環境がつくられていくと思います。また、質・量ともに充実したリハビリを続けることの効果が明らかにされれば、それらがエビデンスとなってパーキンソン病治療全体が前進すると考えています。

安田 そういった可能性をもつレジデンス型のパーキンソン病専門施設は、全国的にも珍しい取り組みです。その分大きな責任も感じますが、患者さま一人ひとりの性格や治療経過を把握し、きめ細かな治療を行っていきたいと考えている私にとっては、今回のご縁をいただいたことは大きなチャンスだと考えています。

——なるほど。高齢化の進行に伴い、パーキンソン病患者さまの数は今後も増えてくることが予想されます。

堅田 だからこそ「PDレジデンス倉敷」がめざす医療機関と介護の連携を成功させること、さらには20年、30年と継続させることに、大きな社会的意義があると自負しています。また、今後は「PDレジデンス倉敷」と同様の施設が登場することも考えられます。ビジネスという意味では競合にあたる訳ですが、そこに競争が生まれ、結果的にサービスが良くなって患者さまのQOLが向上するのであれば、競合は大歓迎です。これまで限られたリソースの中でパーキンソン病に向き合ってきた患者さま、医療者に対して、「新しい選択肢」を提示するためにも、PDレジデンス倉敷をぜひ成功させたいと考えています。

堅田 陽介

株式会社フィロソフィア
代表取締役社長

大阪を拠点に訪問看護ステーションや調剤薬局を展開。倉敷を皮切りにPDレジデンスの全国展開を計画する。

三原 雅史 先生

川崎医科大学 脳神経内科 主任教授

神経疾患全般、神経変性疾患（パーキンソン病など）、神経リハビリテーションといった分野で多くの臨床実績をもつ。

安田 雄 先生

倉敷脳神経内科クリニック 院長

2024年10月より「PDレジデンス倉敷」1階に開設する倉敷脳神経内科クリニック院長を務める。神経疾患一般・パーキンソン病・てんかんが専門。